「師の不在」について

関　一　敏

前号の別冊に井上順孝さんの「師の不在」というエッセイがのっている。大学院時代のあれこれを思いだし、そういえばあの頃は妙に野球につよい一時期があった。野球のつよさと学問とどういう関係があるのか。これはむつかしい問題だが、いま自分の直面している主題なので考えなければならない。東京近辺の民族学八講座で例年野球大会があり、岡正雄杯をめぐってトーナメント方式で闘う。勝敗はうまくできていて、ここ数年の優勝校は、一橋・東大・筑波・明治と変化している。このなかで、筑波の戦績をみると、ビリ・ビリ・一位・二位であった。スタッフのなかで最もこれに力をいれているのは、宮田登氏で、かれの主張は明快そのものである。野球に勝つときは学問がよくなっている。この命題は私個人の信条とも一致しているから、結果からみて筑波の民族学・民俗学の浮上傾向におおきな希望をもっているのだが、なぜそんな命題が通用するのかは、正直なところ説明しにくい。あえていえば、「無用」の行事にたいして「無用」の努力をまとめて注ぐことができるかどうか、にかかっているように思う。研究室もひとつの集団なのだから、その機動力のあるなしはやはり大切な条件なのだとひとまず言っておくしかない。だからこれは野球である必要はかならずしもない。

こんなことを書いたのは理由がある。研究室で学生が伸びようとするときに、つまらぬ人間関係からこれを阻止する力が働かないようにするには、努力がいる。宗教学の研究室はときにイイ加減で微温的な空気に満ちているとみえるかもしれないが、それは良い加減というべきではないか。私はこれを大変な努力の所産とみている。

1973年に大学院にはいったとき、一年うえに井上さんが、そのさらに一年うえに中牧さんがいた。『日本宗教と日系宗教の研究』という途方もなく大部な本を近年まとめた中牧弘允さんである。当時中牧さんは、フィールド・ワークを重視した宗教変動の主題にうちこむかたわら、空手によき師をえてその道にも力を注いでいた。師は南郷継正の名で「武道の理論」を『試行』に連載していたから、中牧さんからその名をきいてビックリした記憶がある。当時はまた、梶原一騎作・つのだじろう画の大山倍達を描いた劇画があって、武道におよそ縁のないものにも極真会の名は知られていた。南郷継正はその極真会の強さは認めながらも、それがもともと体力において優れたゴリラの空手であること、しかし武道の真髄は元来弱いものが上達しうるところにこそあることをつよく主張していた。ならば、いかにすれば上達するかという課題は、実践的であると同時に本質的な「理論」に高められなければならない。

宗教学の大学院にいて、おりにふれて話にでたのは学問的上達をいかにしてはたしうるか、具体的に何をどうすればいいのかの指針だった。岸本英夫の『宗教学』はすでに時代をはなれた見取図にみえ、パーソンズ以降の宗教社会学はベラをふくめていよいよ混迷の度を深めていた。時代の勢いは構造主義と象徴人類学にあったが、構造主義の手法がどう宗教研究にいかせるかはまだ明瞭で

はなかった。象徴もまた諸説紛々で、現場にもちこむにはいくつものスクリーニングを必要としていた。中牧さんは『武道の理論』を柳川先生に手渡して、宗教学での上達の指針をうちだすことの必要を訴えていた。私もまたその結果を知りたいと念じたのであったが、先生がそれを読んだのか、なんと答えたのかは記憶にない。

いまこの時代のこうしたことを思いおこして、整理のつかない考えがいっぺんに湧きおこってくる。それは、上達をどんな形にせよ、技術以上の領分までひとに伝えてもらおうとする心のありようが、伝達をむしろ阻んでいたであろうこと。にもかかわらず、学を名のるなら「弱い」者が一定の「強さ」をもつにいたる道すじは示しうるはずだし、それが教師のつとめであろうと考えるほかないからである。

個人的なことだが、大学院時代から、この二人の先輩には逆らわないことにしていた。それはその不思議な徳の魅力と真摯さに及ばぬものを感じてきたからだし、さらにくわえて二人が武道のひとであることも関係している。けれども、今回、二人のうちのひとり、井上さんの「師の不在」には舌足らずのところがあって、それについて一言いわなければならない。

井上さんのエッセイはわれわれが考えなければならない大切な問題をふくんでいる。それを学問修行での制約と自由といってもいいし、伝達＝共有しうる学問的方法とはなにか、といってもいい。どのような領域でも、やればかならず役にたつ技術的側面はあり、遺物をどう掘出すか、文書をどう読むか、ひとになにをどう尋ねるか、がそれである。これらはものを考える出発点としての資料をいかに獲得し、読解するかにかかわる。この部分の宗教学のむつかしさは、各人の関心対象によって資料化の方法が多様にならざるをえないことである。それをごく限られた数の教師がカバーしうるはずはない。井上さんはそんなことは百も承知しているだろうに、気分は大学院生でひとごとのようなエッセイを書いている。これは、われわれの世代が、今、言うべきこととは思われない。どうせなら、少林寺拳法という武道の世界と学問の世界をならべたうえで、「乱暴な話」をもっと徹底させ、なにがどう同じで、どう違うかの学問論の糸口をだすべきであった。それは、共有しうる技術が宗教学内にあって多様であるなら、冠としてのボーバクたる「宗教学」あるいは「宗教史」とはいったい何でありえ、何でありえないかを今の時代に確認するよい機会となるだろう。

（89-7-3）